

## 江戸の怪談サロン

## ●百物語の館・台本の原話●

## ▼『続向燈吐話』（写本・元文五年（一七四〇）序）

## ▼巻九の十六「丹波国傀儡の霊の事」

一、いづれの頃にや、諸国を廻り傀儡を業としける者、年老ひ、行歩叶わざりければ、生国丹波国笹山辺へ引こもり、手なれぬ農業に心をくらしめ、世をわたりけれども、老ひては心ばかりにて働き得ざりし程に、しだいに貧しく、朝夕の煙も絶へ絶へなるまま、傀儡の古く損じけるを打わり、薪となし、せめて是にて、湯などわかして給べけるに、その夜、この老人狂乱し、足を空に、若き人のごとく走り廻り、呼び叫びけるまま、近隣のもの聞つけ、急ぎとりとどめて、「何者の霊の、何うらみありて憑きたるにや」と問ふに、老人こたへて、「われは日頃この者に寵愛せられし傀儡の精なり。己が盛んなる時は、我をもつて稼業とし、我また彼が為に、扶助をうけぬ。今老て、我を土中に捨て、塵をはらふべき人もなく、むなく鼠の巢に交り、面損じ、衣類腐り破れて、赤裸となり、恥を庭の片すみにさらし、朽ち爛らかせし上に、今細木となし、火中に投ずる恨み、尽べからず。見よ見よ、「古物に霊なし」と侮り汚せし、この者の命、たち所に取りに見すべし」と口ばしり、血を吐く事おびたしく、悶絶して、その夜のうちに死しけるとぞ。

## ▼『続向燈吐話』（写本・元文五年（一七四〇）序）

## ▼巻十の七「女髪の怪異の事」

一、糶町より番町へ行く横町の内に、土弓場あり。その度紋しける男、いつとなく色青ざめ、かたち瘦せかじけるゆへ、親しくしける友たづね来り、問ひけるは、「いかなる辛勞ありて、かくは衰へけるぞや。ひとり住のつれづれなるまま、心の外にまよひ、かりそめならぬ恋路の闇をたどり、逢わぬ辛さに心気を煩わする事などや有けるか」と言ふに、

かの者答へて、「さらさら身の不義いたづらゆへ、心を痛ましむるにあらず。さのみ又、「我が身疲れたる」ともおぼへねば、今まで誰人にも言わざりしなり。過ぎつる四月下旬より、夜ふけ人静まりて、我が伏し居たる蚊帳を廻るものあり。「その姿をも現さん」と心がけしに、出来れば、我知らず心乱れ、夢幻のごとくなりて、所存を果さず。ただ黒き人影のみを覚へぬ」と語る。

友聞て、横手をうつて驚き、「さればこそ、怪物、支体を勞し、言わねど顔色に表れたり。その妖、心裏に入ば、一命助かりがたし。今宵ひそかに同臥し、その体

を見ん」と言ふ。

「兎も角も計らひくれよ」と約して待つに、丑三つばかりの頃とおぼへ、ぞつと身の毛うるほひ立ち、何となく恐ろしさに、身震ひ、手足一所に縮まりしが、この者、強勇なるものにて、気をたゆませず、目を見はり、「あやしきものや来ること、心をつけ見るに、案のごとく、色は知れざれども、三尺ばかりの影、二人が伏し居たる蚊帳を廻ること数篇、時を移しぬ。

主は、このもの来ると氣を失ひ、惣身汗を發し、悲叫するのみなり。ややありて、この影いづかたへ行けん、いづくともなく消へ失せぬる頃は、明け六つの拍子木聞へて、夜はしるじろと明けぬ。

やうやう主も氣づき、起出けるゆへ、この友申しけるは、「我つらつら思ふに、妖物、汝に恨みを含むと見へたり。その故は、同じく伏し居たる我は、異なることもなく、汝はおびえ苦しむにて、察すべし。朋友のちなみ、かかる時なり。こよひも又、一所に伏して、妖ふたたび現れ出なば、我が帯せしは、覚への物なり。ねらひ寄りて一刀に伐殺し、以後さまたげを断ん。此もの、いづかたより出入するぞ」と尋ねければ、「釣場の明り請し窓より、飛入る音ありて、その姿を見す」といふ。

「目に見へぬ変化さへ、あるひは弦を鳴らし、あるひは名剣を振て、わざわひを除く。いわんや蚊帳を廻る影、颯然とかたちあり。やわか打留ざらんや」と、用意して、その夜も前の「ごつく伏し居たり。半身は蚊帳の内、半身は外へ出て、脇差を抜き、ふとんの下に隠し、「すわともあらば、払ひ切にせん物を」と、勇氣たくましく待つ所に、丑寅の刻間にいたり、窓よりひらひら内へ入る物あり。

「それよ」と脇差取らんとするに、蚊帳の内へ入たる身はあたたかに、外へ出せし半身は、氷のごとくなり。合期し得ず、思わず肩を引き入れぬ。妖物、前夜のごとく蚊帳を廻ること、すでに五度に及ぶ。あるじは大汗身をひたし、前後を知らず、叫び伏したり。

六度目に、頭の方へ行過るを、ふとんの下の脇差とるより、起きかへりざまに払ひ切に、刈りつけたり。手ごたへして、影はたちまち消へて見へず。夜明け、主の熱も覚ぬ。その所を見るに、血おびただしくこぼれ、それより窓へかかり、外面は壁に付て、屋根へ伝ひ登りたる体なり。

梯子かけなんどして、その屋根を見るに、段々血を引き、棟の少しし出たる所に、血したたか溜り落て、ここにて留まりぬ。その側に、女の髪一抓み、これあり。余物は見へず。いかなる妖怪にや、知れる者なし。この髪を遠く捨て、血の付し所々葺き替へ、家内の血を拭ひ、「窓のつけ所あしき故にや」と、これもその日の内に付かへけるよし。

かくありて後、妖ふたたび来らず。主の病氣も、程なく快氣を得たりけるとぞ。

\*木越治・責任編集『江戸怪談文芸名作選 第五卷 諸国奇談集』（国書刊行会、二〇一九年）による。『続向燈吐話』の引用は、以下も同じ。

■『江戸怪談文芸名作選 第五巻 諸国奇談集』「解説」

勝又基「『続向燈吐話』解題」

巻十の七「女髪の怪異の事」のラストシーン、逃げた妖怪のものとと思われる女の髪一掴みが屋根の軒に残っていた、というくだりは、秋成『雨月物語』の「吉備津の釜」の先例として注目される。今後の典拠論に何らかの助けとなるのではなからうか。

その一方で、皮肉なことであるが、いわゆる狐狸妖怪の現れない逸話群が目を引く。(中略) これらは今考えられている典型的な江戸時代の怪談とは趣が異なる。しかしながら、これを怪談でないと断ずることは難しいだろう。読めば、骨太の迫力で人間そのものの恐ろしさを伝えてくるからである。こうした話柄が混在する背景はなんだろうか。やはり想起させられるのは、漸の点取り、という場である。目の前にいる聞き手を引き込み、恐がらせるといった目的の下では、狐狸妖怪や幽霊の有無は怪談の前提条件ではなかつただろう。

●くだん (件) ●

■『日本怪異妖怪大事典』(二〇一三年、東京堂出版)

及川祥平「くだん【件】」

半牛半人の予言する怪異。生後すぐに予言して死ぬ。その予言は必ず的中するとされ、証文等で結びの文句とされる「よって件の如し」という評言は、件の予言が確かなためであるという俗説とともに語られる。

件は、多くは人面牛身であるが、まれに牛面人身とする場合もある。また、馬、蛇、魚など、人と牛以外の動物との組み合わせの件についてもごく少数ながら報告がある。出生に関しては、牛から生まれるとすることが多いが、人から生まれるとする例もみえる。世の中に変事がある際に生まれるなど、なんらかの兆しと見られる場合がある一方、親の因果や獣姦と関連づけられる事例も見られる。

件の伝承は主に西日本に分布し、第二次大戦前後に噂話・流言として流布した形跡がある。まれにこれを見つけたという語りも記録され、なんらかの異常児が件と見なされたこともあったことがわかる。一方、近世には件を描いたかわら版が板行され、図像が護符になると謳われていた。このことから、件は近世のかわら版文化の中で、言葉遊びから生み出されたとする説もある。

近代以降、件の剥製が見世物にされた例もあるが、それらは異常な形状をした牛馬の遺骸を加工したものである。また、小説・漫画等の影響で件は近年でも知名度が高い。

▼『続向燈吐話』(写本・元文五年へ一七四〇序)

巻十の一「駿河国藤枝山中、件 出る事」

一、駿河国田中の城主、本多伯耆守殿領知の百姓、深山へ木こらんために、わけ入ける処、首より上は婦人の面にて、手足形は牛に似たる物出て、人のごとく立

て歩み、この百姓を見て、ここに笑ひながら、山奥へ入りぬ。

見なれぬ異形の物なれば、恐れわななき、はうはう逃げ帰って、「かく」と人々に告げしかば、あやしみ疑ひ、かれに伝へ、それに物語しけるあいだ、事ひろく聞へて、領主伯耆守殿伝聞あり、右山中を狩らせ、御覽ありけるに、いつの間に逃失せけん、行方なし。「見し」といへる者の偽りならんか」と、御疑ひ少なからず。数日おし籠め、さし置れけるが、ほど経て御免ありけるとぞ。

この獣の名を「件」と申よし、その在所の者の語りし。享保十年あまりの事とかや。

## ●さとり (悟り) ●

### ■『日本怪異妖怪大事典』(二〇一三年、東京堂出版)

#### 玉水洋匡「さとり【悟り】」

山中に住み、人の心中のすべてを悟るといふ妖怪。風体などは山男や老人などである。人の考えをすべてを言い当て、おびえさせた後食べようとす。その時偶然に囲炉裏の木片がはねるなどしてサトリに当たると、「人間は思いもよらぬことをする。おっかない。」と言ひ、逃げる。また黄金の弾丸を見ると逃げるともいふ。逃げるとき、自分を見たことは言うな、と告げて去る。現代では小松左京が「さとるの化物」といふ作品でサトリを超能力者として解釈して描いた。

### ▼『続向燈吐話』(写本・元文五年(一七四〇)序)

#### 巻十の二「相模国木場妖怪の事」

一、相模国大山近所の獵師、あるとき小鳥打に出けるが、思わず山ふかく入り、甲州さかひまで至り、すでに日暮れければ、これより引返し帰りしに、大山へ来り見るに、最早夜ふけて闇夜なれば、道路見へわかず。「所詮まよひ歩かんより、ここに一夜明して、翌日帰らんもの」と思ひ、山下の人の、常にこの山へ入り、材木とりて、杣取り置小屋あり。この小屋へ入り、木のはしなど集めて、火縄の火をたきつけ、得物せし雉鳩の類取出し、この火に焼きて食し、餓をしのぎ居けるに、次第に暖まり、眠りきざし、いと心よげにうち傾き、とろとろしける所に、山上ざわざわ鳴りて、下り立つものあり。

この音に目さまし、ふり仰のひて見るに、長は三四尺もあらん、惣身黒く、眼、星のごとくに輝きし異相のもの、獵師が向ふへづかづか来り、火辺に手足を出し、あたりけるに、いぶせく恐ろしかりけれども、逃出んにも、四方みな山中にて、人家遠ければ、「なまじい走りなどして、彼に怒りの氣にふれば、いかなる憂き目をか見ん。よしや逃れぬ命ならんにおゐては、この座にて兎にも角にもならん」と思ひ切て、ただうつむき居たり。

このもの笑ひながら、「逃走らんよりは、座して安否を待たん」と、獵師が心中に思ふ事、あからさまに言ふにぞ、いよいよ身も震われ、口のうちに弥陀の称号をとなへ居ければ、このものもまた、弥陀の号を唱ふ。

獵師つくづく思ふは、「言わざるに知るは、是ぞまさしく天狗といへるものならん」と。このものまた、「天狗といふものならん」と、獵師が心中、鏡にうつし見るがごとく、思ふ事一々言ひけるがゆへ、「所詮見じ、思ふまじ」と、打かたむき、火にむかひ、寒夜なれども、惣身汗にひたし、わなわな震へながら、面に手をかざし居たり。すでに夜もふけ過て、しんしんと物さびしく、たき火もしだいに燃へ尽して、燃へ杭、そこかしこに乱れ散りしを、おづおづ手をさしのべ、取り集め、木の葉うへに置き、吹つけければ、また炎々と燃へ出し、この火をちからに、「消さじ」と、木のはし、枯木の枝を、傍にあるをば取りて、ひたと折て焚きけるに、ひたと焚きけるに、ここに三尺ばかりもあらんと見ゆる、くねりたる木のはし、木口に火燃へ付きてありしを、中ほどを膝におしあて折けるに、いかがしけん、この燃へ杭の片折れ飛んで、化物の面にあたり、「あつ」と言ふて立退り、「さてきて、人ほど恐ろしき工あるものなし。折て焼くかどばかり心つかせて、我が油断をさせて、かく面を撲し憎さよ」と、呟き呟き、山の上へ、すさまじき音して、駆けのぼりぬ。その声の耳に残り、恐ろしき例へんかたなく、夜の明るを待ちかね、東白みて、いまだ道も見へざりけれども、そこを立出で、逃げ帰りしとぞ。「この化物、何ものの所為とも知れる者なし」と、その獵師江戸へ来りし折から、物語しけるを聞き」とて、語りぬ。

▼『続向燈吐話』（写本・元文五年へ一七四〇序）

巻十の三「陸奥国さとり的事」

一、右の物語を聞いて、奥州泉の者申しけるは、「我國にも、かかる妖物、折々人家へ来り、食物を盗み食ふ。長四尺ばかりもあらん。猿猴のかたちに似たり。人の思ふ事、言わざるに悟りて、口真似をなすゆへ、これを名づけて「さとり」といふ。ある百姓の家へ、桶の輪かけ来りて、竹を割り、輪を廻し居ける所へ、かのさとり来りて、輪をかくるを斜めに詠め居けるが、いかがしけん、竹の末はねて、さとりが面をしたたかに打ちければ、おどろき去つて、ふたたびこの家へ来らず。それより以後、桶の輪かけを見ると、怖れてあへて近づかざる」よしを語りぬ。

▼鳥山石燕『今昔画図続百鬼』（天明八年へ一七七九）刊

「**覚**」  
ひたみの 飛驒美濃の深山に獺あり。山人呼で、**覚**と名づく。色黒く毛長くして、よく人の言をなし、よく人の意を察す。あへて人の害をなさず。人、これを殺さんとすれば、先その意をさととりて、にげ去と云。



\*九州大学附属図書館「九大コレクション」による。

▼平秩東作編『狂歌百鬼夜狂』（天明五年へ一七八五）刊

「**さととり**」 参和

その顔は三六さつて猿眼 これや四そうをさととりなるらん

「三六さつて猿眼などと戯言をいいながら、双六でよい目を出すその顔は、さすがは人心を察知する聡明な化け物「さととり」だけあって、次に出る目も知っているようだ。」

\*多田克己編『妖怪画本・狂歌百物語』（国書刊行会、二〇〇八年）による。画像は、Metropolitan Museum of

▼天明老人編『狂歌百物語』八編（嘉永六年へ一八五三刊）

「さととり」

山賤やまがつが焚火をかざす掌たなびらに さとりが悟る胸の占方うらかた  
 酔よひりて伏したる袖そでが寝言ねごとまで さすがさとりは悟り得ぬなり  
 狩人かりうどの狙ねらひ違ちがうて逸それ行くは さとりも知らぬ矢先なりけり  
 悟さとりしは九年母くねんぼ「香橋」より紀の国の みかんを糸いとでくゝる猿智恵  
 雪折ゆきをれの松の拳こぶしは深山路みやまぢの さとりも知らぬ苔しもとなりけり  
 来くべきぞと気取りて袖そでが火を焚もけば さとりは早く当たりあたりにぞ寄る  
 山賤やまがつの櫓ぼたの撥はね火の鉄炮てつぱうに 当たるさとりや肝かんを消けすらん  
 都月庵駒綱  
 綾あやのや  
 楽月庵  
 綾あやのや  
 松月亭繁成  
 雛室正女

達磨柿あるは九年母くねんぼ取り喰くらふ ゆゑにさとりの名をや負おひけん  
 里近さとき所は嫌きらひ山深く さとりは世をも悟りたりけん  
 人里ひとをさるの切るべし穴住居すまひ これも浮世をさとりなるらん  
 下毛葉鹿 壺蝶楼花好  
 語同堂春道  
 人の知恵ちえさとりに難がたしと恐れけり ぼんと撥はね火の竹の不思議を  
 江戸崎 有文  
 又今宵またさとりや来きんと山賤やまがつの 申まをの下がり「時刻」に業仕舞わざふらん  
 在江戸 獅々丸  
 撥はねた火で毛を焼きにしか恐おそがりて ちりちりしたるさとり可笑をかしき  
 青則  
 年としふりて身に生なふる毛の針はりをもて 人の心を悟りけるかも  
 古河 記永居  
 江戸崎 広丸  
 もの言ことはで心に思おもふ事知るは 山吹生やまぶふる井出いのさとりか  
 松蔭  
 猿さるといひ狒ひび々ひびともいへる言の葉を 覚束さくすくなくも我は悟りつ  
 青則  
 人心こころさとの術わざもて燃もやす火の とんだ所で恐れなしけり  
 青則  
 木魂こたまにはあらで心に思おもふ事 さとりが胸むねにひびくとぞ聞く  
 春道  
 思おもふ事汝うぬが胸むねにも悟さとられて さる（猿）ものなりと身も縮ちぢむなり  
 弓の屋  
 打うたんとて握にぎる拳こぶしの口くちをさへ 早くさとりに弱よわる禅僧  
 画安  
 木心こころを見て伐きり出いだす杣人そまびとを 気心きこころまでもさとる曲者  
 慈悲有  
 茶の水も乏ひしき山の木きこりらが 心を先に酌しやくめるさとりは



\*多田克己編『妖怪画本・狂歌百物語』（国書刊行会、二〇〇八年）による。表記を改めた箇所がある。

画像は、Metropolitan Museum of Art Libraries: Digital Collections

<https://libmma.contentdm.oclc.org/digital/collection/p16028coll7/id/5188> より。